# １年生「グローバル探究」連携授業報告（Ｂ講座）

日時：平成２９年１０月４日（水）　１０：３５～１２：２５
場所：高志高校１３講義室
講師：古澤　拓郎　先生
（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科東南アジア地域研究専攻准教授）
テーマ：病気の起源から考えるアジアの健康と環境
対象：本校生徒４０名（１年生ＳＧＨ生徒４０名）
内容：

１．自己紹介

研究者とは、皆さんが高校で学ぶような既存の知識を学ぶものとは異なっていて、新しいことを調べていくものである。私は、海外での現地調査をしながら、日々研究に努めている。

２．グローバルヘルス（健康と病気）

健康とは「病気ではない」ことと思いがちであるが、健康とは 1948 年の世界保健機関憲章では「身体的・精神的・社会的に完全な良好な状態であり、たんに病気あるいは虚弱でないことではない。」と定義されており、1999 年の修正提案では、良好な状態の観点に霊的が加わり、良好な状態は良好な動的状態に修正されている。英語で言うと“well - being”が重要ということである。

病気とは、生物学的・生医学的な「疾患」と主観的経験による「病い」があり、環境要因と遺伝要因の関係により構成されている。死因の主なものとして、2014 年の東アジア（日中韓）は悪性新生物・心疾患・呼吸器感染症が上位３位を占めている。東南アジア（タイ・インドネシア）・メラネシア（パプアニューギニア）では、2002 年が感染症・寄生虫症・心疾患・悪性新生物が上位３位を占めていたものが、2014 年には東南アジアでは心疾患・悪性新生物・呼吸器感染症が上位となり、感染症・寄生虫症がタイでは５位、インドネシアでは３位に下がっている。このことから、東南アジアの経済発展が見られ、東アジアと同様な傾向となった。その一方で、メラネシアでは、感染症・寄生虫症が１位のままであり、経済発展はこれからと思われる。このことは疫学転換・疾病転換で説明することができ、発展途上国では感染症が増え、先進国では、生活習慣病が増えることをさすものである。

（３）風土病

風土病とは、各地において、その土地で長期にわたり、繰り返し流行してきた感染症をさす。感染症とは、ウィルス・細菌・真菌・寄生虫などの微生物が人間に感染することで

起こる。三大感染症は、結核・HIV（エイズ）・マラリアであるが、先進国では対処法が確立しているため、心配はない。感染症の起源については、温帯の病気は家畜動物（牛・豚・鳥）、熱帯の病気は野生動物が多い。温帯では、昆虫（蚊）は季節が限られ、大流行はするが長期免疫ができる。一方熱帯では、常に昆虫に媒介され、地域内のみで感染し免疫ができにくいものである。

（４）『銃・病原菌・鉄』死の贈り物

大航海時代以降世界がグローバル化し、ヨーロッパから太平洋・アメリカ大陸へ人々が移動した。これにより、家畜（農耕社会）由来の感染症が、非農耕社会へもたらされた。非農耕社会では免疫がなく致命的な結果を招いた。コルテスがアステカ文明を征服した際には、2000 万人の人口が一気に 160 万人まで減少した。感染症は銃や鉄よりも恐ろしいものとなった。

（５）非感染症

生活習慣病と精神疾患は、世界的に増加している。薬での対処法はあまり行われないため、感染症より問題かもしれない。正常な状態にくらべて体重が重い、あるいは体脂肪が過剰に蓄積している肥満や、塩分の過剰摂取などで血圧が正常範囲を超えて高い状態が維持されている高血圧により引き起こされているもので、グローバルヘルスの取り組みが求められている。

（７）病気の起源を探る

人類の移住と拡散において適応と文化が重要な意味を持つ。肌の色は日照への、鎌状赤血球はマラリアへの適応であり、気候区分の生物群系や乳糖分解酵素活性は生業での適応である。太平洋へ広まっていく間に、飢餓など食料がないことも多かったため、肥満傾向となった。しかし、経済力が上がると肥満も減少するのではないかとジェームズ・ニール博士による倹約遺伝子型仮説があり、レプチンホルモンが出されレプチン受容体が受信すると食欲と代謝の調整へとつながっていくと考えられる。

（８）まとめ

世界の健康問題に取り組むことは、やりがいのある仕事である。健康は地域の環境、人間進化の歴史・文化に深く関わっている。地域の見かけ上の違いは、人間が一つの連続体だから起こる。起源と地域の深い理解に基づき、それぞれの地域・人に適したあり方を探究しよう。